

《現場から》

教科書脚注から考える

赤堀(阿内) 加 苗

高校一年生の授業で『伊勢物語』「東下り」(第九段)を扱った時のことである。一行が見た富士山について「その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける」と表現した場面を解説していた。教科書の脚注を用いて、「塩尻」とは塩田で塩を採るために、砂を山の形に盛り上げたものであるという説明をした。すると生徒から「当時の人はみんな塩田につくられる塩尻を知っていたのですか」という質問をもらった。素朴な疑問だが、言われてみれば、なるほどその通りである。「なりは塩尻」とたとえられて想像できるほど京の貴族にとって「塩尻」は身近なものだったのだろうか。

まずは生徒たちが持参しているそれぞれの古語辞典で調べてみたが、どれも教科書の脚注と同じ解説である。次回の授業までにもう少し調べてくると約束してその日の授業は終えた。早速調べてみると、この「塩尻」という語の解釈について鎌倉時代にはすでに苦心していたようで、様々な説が出されてきたことがわかった。現在は、天野信景(一六六三—一七三三)の説をもとにした解釈が通説となっている。宮澤俊雅氏は、『塩尻』覚書—伊勢物語九段『なりはしほじり』考—(『北大文学研究科紀要』第一〇

七号、二〇〇二年八月)の中で、この塩尻という語のこれまでの解釈を整理し、通説の問題点を指摘している。

次の授業ではこれらの様々な解釈と宮澤氏の御論を生徒たちに紹介し、皆で「塩尻」とは何なのかという議論をした。定期試験の範囲を気にしつつ、授業としてはずいぶん長い寄り道である。しかし、辞書や教科書は「正解」が書いてあるのではなく、たくさんさんの研究の積み重ねによってつくられてきたものであること、そして編集の時点で最も妥当だと思われる説が採用されているのであり、新たな研究によつては今後変わっていく可能性があるということ伝える良い機会となった。もしかしたら自分たちにも新しい解釈ができるのではないかという、わくわくするようなひと時を生徒たちとともに過ごすことができた。

質問をしてくれた生徒も今は卒業し、工学部で学んでいる。当たり前と思われることにも疑問をもち、それを追究していく姿勢はきつと国語だけではなく、他の分野でも大切なことに違いない。日頃の授業は時間の制約があつてなかなか寄り道ばかりはできないが、生徒の素朴な疑問を大事にできる授業を目指していきたいと思う。

(静岡県立伊東高等学校)

初心忘るべからず

宮内 駿

最初に少々自己紹介をいたします。私は修士課程を修了後、新任として着任して三年になります。共学校での二年の非常勤を含めると、そろそろ新人とは呼んでもらえない年齢になりました。

教育学部生当時は、金井景子教授を中心とする「中等国語科インターンシップ」の一团（一座？）に加えてもらい、群読をしたり、出前授業をしたり、落語を習って披露する機会をいただいたりしました。（パソコンの古いデータを見返してみると、青臭い思いにとられます。）また、漠然と「漢字の研究がしたい」と思い、指導教授の内山精也先生にお願いして文学部の授業に出させてもらったりしました。その縁で大学院は文研の中国語中国文学コースに進学しました。これらを中心に、国語国文学科で得られた知見や同志はかけがえのない存在です。学部を卒業してからも、教員になった仲間、一般の仕事に就いた仲間、夢を追いかけている仲間には常に刺激をもらっています。

今の仕事に直結することとして、「ただ品詞分解して口語訳をするだけではないけない」「生徒それぞれが、受動的にインプットをするだけではないけない。」「国語に興味のない生徒にも、授業に参加してもらうためには何が必要か。」など、まとめれば、「ワセダで学んだことをどれだけ目の前の生徒たちに落とし込めるのか」ということを漠然と考えていました。

果たしていま私が展開している授業は本当に生徒たちの力になっていいのか、と自問自答の日々です。幸か不幸か、本校の生徒の多くは大学受験をしなくて済んでしまっています。その「浮いた」時間を、部活動や短期留学やアルバイトなどに充てられることが本校のメリットであると考えています。（他の付属校でも同様のことが言えるのではないのでしょうか。）

では、彼らにとって必要な「力」とはなんでしょうか。本校では大学への推薦に際し、卒業論文の評価が大きな割合を占めます。高三生は、希望の学部学科に進学するため、論文執筆に取り組みます。その際、彼らが国語の教員に求めてくるものは、文章の校正が中心です。一七年度の卒業論文の題目を見ても、観光学に関わるもの、テレビゲーム論など、社会科学系が中心です。それだけ生徒たちが社会に関心を持っている、ということ自体は良いことだと考えています。しかし、残念なことではありますが国文学系に進学する生徒の数は多くはありません。知識として国文学の基礎を授けることは言うまでもなく大切ですが、社会生活を営むうえで文章を正確に読解し、他の人とコミュニケーションを取っていくために必要な力を、授業を通してつけていかなければならないと考えています。

仕事にも慣れ、良くも悪くもルーティン化しつつある今、「生徒たちにとってよい授業とは何か」ということを、初心に帰って考えていこうと思います。

（立教新座中学校高等学校教諭）

「実践力」を重視した高専国語教育

中 田 幸 子

私は、研究機関に所属したいという一念より、二〇一四年度から栃木県の小山工業高等専門学校に勤務することを決意した。しかし、同年一月に妊娠が判明し、同年八月末に双子を出産した。文科省管轄の高専の職場は、ライフワークバランスを重視している。職場の皆様の温かい承諾を得て、二年間育児休暇を取得させて頂いた。そして、二〇一六年度より、新しい職場、小山高専で仕事復帰をした。復帰一年目から一年生の担任業務がついた。一年目より一年生、三クラスと電気電子創造工学科の二年生、二クラスの国語を担当することとなった。

高専の学生は、理数系の学問に極めて高い能力を備えて入学してくる。数学では、一年生の授業でも大学の基礎数学レベルの問題にいきいきとした姿勢で取り組んでいる。その一方で、中学からの調査書を見るとクラスの七割超の学生が嫌いな教科は「国語」と書いてくる。また、ものづくりが好きな学生たちは、個別にコツコツと手先を動かして何かに取り組むことが得意であるが、他の学生と積極的に会話を楽しむということが非常に苦手である。四月の自己紹介でもクラスの七割程度の学生が「私は自分から話しかけることが苦手なので、皆さん話しかけて下さい」と挨拶したため驚愕した。多くの学生は、国語は答えが複数ある点が嫌いだという意識を持ち、粘り強く考え詰めれば一つの答えに辿り着

く数学や物理を好む。

ところで、高専では「国立高等専門学校機構における技術者教育の質保証」をねらいとした「モデルコアカリキュラム」(以下MCC)が設定されており、それに従って、シラバスを構築する必要がある。MCCは、「教員が学生に何を教えたか」から「学生が何をどこまで到達したか」に教員自身が視点を転換し、個々の学生の到達度を常にチェックするシステムである。学問および学生の人間力のコアを重視し、学問のより高い専門性をモデルとして進めることが必須となる。そして、高度な技術者育成のための「教育の質保証」が教員にとつてのキーワードとなる。

教授法としては、講義型の授業より、グループ型、ワークショップ型の授業を推奨する。このことは、高専教育が、社会や産業界、国際社会で早期から活躍できる技術者、研究者の育成を目指していることによる。つまり、常に「実践力」の高い人間像が求められる。

そこで国語の授業においても、表現の授業に特に力を注いでいる。声のトレーニングから朗読、スピーチ、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションと「伝え合う力」を育てることを目的とした学生主体の授業を積極的に行っている。理系の学生は、「心で感じる」という感覚よりも「論理が成立している」という感覚を好むため、グループで行うディベートや個人で行うプレゼンテーションをゲーム感覚で取り組むことを楽しむ。

このように技術者、研究者として社会で必要な力、「実践力」という点を重視した教育が、国語教育においても行われている。

(小山工業高等専門学校准教授)

現場から

大池 公紀

三十六年間東京都立高校の国語科教員そして管理職として勤務しました。最後の三年間は、全国の高校国語科教員の研修組織である全国高等学校国語教育研究連合会会長も務めさせていだき、全国の国語科が抱える問題などを学ぶ機会にも恵まれました。新しい時代に向けて新しい指導要領が提案され、これまで高校教育には余り手をつけてこなかった文部行政が、今回は高校教育の大改革に挑んできた、その覚悟を感じます。今後しばしは大風が吹き荒れる、そんな予感もします。高校現場が、改革に本気で臨む覚悟が果たしてあるのかが問われている、そのように感じます。

三年前に都を退職し、現在は千葉県にあるこじんまりとした明海大学外国語学部に拾ってもらい、教職専門科目と共に国語科教員を育成する教科教育法等の授業をもっています。

本学は、千葉県の小さな大学です。高校時代に培ってきたスポーツを継続するために大学に進んできた学生も多く、中には農業学科、水産学科などの専門高校の出身者もいます。普通科出身者にしてもカリキュラム的に古典を十分には学習してこなかった学生もいます。そのような現状を踏まえ、二〇一七年から教職専門科目学修前に、国語の基礎科目として「教職基礎セミナー（国語）」を二年間四期に分けて学修する独自科目を新設しました。

この講義は、完全に高校の国語の授業です。文語文法（力行変

格活用や形容詞のク活用シク活用！）のおさらいから始まり、現代文にしても犀星や村上春樹氏の作品を「あなたはどのように感じるの？読むの？」と迫ります。

ただ、先述したようにスポーツを将来も継続的に指導する夢を抱くがために添え物としての国語科教員資格を取得しようと、若干安直な気持ちで履修を希望した学生もいます。昨年度は、一年次のスタート三十五名の履修者がいましたが、結局今年二年生でも履修している学生は二十名弱。幾人かの学生には現実を直視させ、国語科教員資格を取ることとは決して易き道ではないことを理解させ、他の選択をさせることもありました。勿論、それをのり越えた学生には、全力をもってしつかり力をつけさせます。少し様子が違うのは、グループでの学習があつたりプレゼンを求めたりと嘗てのやや一方的な授業形式だけではなく、今後求められる新しい学習の在り方を積極的に提示しています。時にはダメじゃないかと怒り、時には立たせ、時間内に二回は発言するように仕向け、結構アグレッシブな授業を展開します。

この講座では、国語教育の原点に立ち戻りながらも、国語力の育成だけではなく、教員として人と繋がることの喜び、そしてちよつとだけ文学の楽しさなども教えられるように現在も試行の真つ最中です。

（明海大学外国語学部教授）

文学の現場と想像力

フィールド

西野 厚 志

或日の暮方、私は教室で「文学と聖地巡礼」とかいう講演会が始まるのを待っていた。五〇人ほど入った会場の前から五列目（前四列は空席で実質的に最前列）のど真ん中に陣取っていた私のゼミ所属のM君が、開始から五分しておもむろにノートパソコンを開いた。講演内容を記録するため、ではない。抱えているレポートに取りかかるため、ネットでその課題に必要な情報を収集するために。さいわい講師からパソコンの画面は見えていない。が、逆に聴衆からは全く関係のないウェブ・ページを閲覧しているのが丸見えではないか。本来、授業中に内職をするような不真面目な学生ではない。いったい、彼に何が起こったというのか……。

私が所属する京都精華大学人文学部の学生は三年前期に半年間キャンパスを離れ、国内外（北海道・沖縄・韓国・台湾・ベトナム・フランス・ドイツ・スペイン・アメリカなど）の提携大学で言語や文化を学びながら各自設定したテーマでフィールド・ワークに取り組む。その期間、私は京都に残った学生たちと「文学散歩」を実施している。文学作品の舞台や作者ゆかりの土地、文学館での調査から、文学表現を新しく捉えなおす試みだ。

例えば、谷崎潤一郎の『夢の浮橋』には「鞍馬行電車の順序で云ふと、出町から四つ目が修学院、次が山端、次が八幡前、次が岩倉」云々とある。現在の鞍馬行電車（叡山電車）の路線図では、

岩倉、木野、京都精華大学前駅と続く。小説世界を延長した先にある本学から『僕は明日、昨日の君とデートする』（作者は卒業生）で主人公の男女が出会う叡電に乗って出町柳駅へ、歩いて旧谷崎邸「後の潺湲亭」に向かう。『夢の浮橋』の舞台ともなった邸内の谷崎の書斎を見学する。周囲には、都を去る光源氏が歌に詠んだ糺の森、復元された鴨長明の方丈の庵、川端康成が『古都』を執筆した泉川亭、森見登美彦『四畳半神話大系』の「私」の住む下鴨幽水荘もある。学生に「私たちが物語の登場人物なのかもしれないね」とキザなことをいつてみたりする。実際、物語の場面を想像せずには現実の風景の中を歩くことが出来なくなっている。

ときに詩人の想像力は「みぞれ」を「天上のアイスクリーム」に、小説家のそれは「檸檬」を「黄金色に輝く恐ろしい爆弾」に変える。「想像力とはむしろ知覚によつて提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけでも基本的イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ」（バシュラール『空と夢』）。非現実的な虚構も共感する者が多数になれば実在となり、言葉と想像力は現実や社会のあり方を少しずつ変えてゆくだろう。

ふたたび暮方の教室。講師は冒頭で「文学とフィールドの知識は営業トークに使えるだけ、大学の勉強は社会では役に立たない」と言った。きつと、そうか。と、M君が呟いたか、どうか。ともかく、彼は雑音に耳を塞ぎ、レポート課題を再開したというわけだ。外は、すでに黒洞々たる夜。M君のこれから歩む行方は、彼自身を含めて、まだ誰も知らない。

（京都精華大学）

タイのモヤシと日本のモヤシ

村松 純 光

教育公務員を辞め、この四月からタイ・バンコクの在外教育施設、通称日本人学校の高等部で働き始めた。バンコクには世界最大規模の日本人学校があるが、そちらは義務教育課程で、私が奉職する高等部の方は設置者からして異なる、全校生徒が五十人に満たない小規模校である。校名に「バンコク」のクレジットが入っているが、市街地からは車で小一時間、もとは他県であったミンブリーという地区に校舎を構えている。

日系企業の駐在員家族が多く住む街スクンビットからスクールバス数台に分乗して登校する生徒らは、皆が毎朝五時起き。渋滞を避け早朝に市街を出発するバスは、生徒各々が暮らすマンションから学校までを結ぶ唯一の交通手段である。帰日も夕方の渋滞を避け、十五時半には学校を一斉に出発し、マンションの玄関口まで生徒を届ける。この、完全なるdoor to doorシステムの背景には、当然バンコクの交通事情、治安問題があるわけだが、せっかく異国に暮らしながら、日本人コミュニティからほとんど出ることなく、完全防備の中で暮らす生徒たちは、懐かしい言葉で言うところの「モヤシっ子」そのものである。「放課後」がないため、部活動もかつての「必修クラブ」のような扱いで週に一、二時間程度。高校生の有り余る体力は在学中ほとんど発揮されずに終わる。

在外教育施設は日本の学習指導要領に則った教育をおこなう決まりであるから、私の勤務校でも授業は日本人教員が検定教科書を用いて実施している。全学年の国語科目を受け持っている私は、

世に「定番」と言われている教材を同一年度で網羅するという、日本では教員数の少ない定時制ないし分校等でしか味わえない経験をさせてもらっているが、「羅生門」「山月記」「こころ」「舞姫」(これらを「定番四天王」と言うのだそうである)等の読みが、ここバンコクで何か変わるところがあるのか、ということに大きな関心を抱いている。

前述したとおり生徒の多くはモヤシっ子で、日本人コミュニティからほとんど出ないまま、卒業と同時に(親の任期しだいだから、卒業を待たずに、という生徒も少なくない)日本に帰ってしまう。バンコクのビル街にある自宅と、ミンブリーの学校と、そこを往復するバスの車窓越しに見た風景―ただ、生徒に聞いてみると、バスの中では皆寝ているかスマホをいじっているかで、窓外の景色に頓着する者などいないと言う―が日常の全て(なわけはないが、敢えてこう書く)である子ら。それから、学年に数名ずついる、日本語があまり得意ではない日泰ハーフ(注)の子ら。彼らに、下人や李徴や「私」や豊太郎はどう映るのか。

そんなもの、現代日本に暮らす高校生と大差ないだろう、モヤシはモヤシだというツツコミには、当座聞こえないふりで通そう。

注 昨今「ハーフ」の語の言い換えとして「ダブル」がもちいられることが一般的のようだが、浸透度はそう高くないように思われる。違和感を訴える当事者もおり、単純な言い換えは却って危うい事態を招くものと考え、筆者は教場での使用にも慎重を期している。「ハーフ」はベストな言い方ではないかもしれないが、諸手で「ダブル」がいいと言うこともできない以上、今回は現在も当事者がよく用いている「ハーフ」の語を選択した。